

特集展示 山下彬麿-「くじゅう」に魅せられた先哲-

7月17日(土)~8月29日(日)

1. 山下彬麿について



山下彬麿(1885~1955)は、現在の宇佐市に生まれ、中津中学校、第一高等学校、東京大学法科を経て、弁護士になりました。昭和2年(1927)、油屋熊八の紹介で初めて「くじゅう」を訪れて以来、その大自然の荘厳さに魅せられ、名曲「久住高原の唄」を制作しました。昭和11年(1936)に京都に移住して以降も「くじゅう」への思いは変わることはありませんでした。

本年、8月11日から12日に第5回「山の日」記念全国大会が、くじゅう連山地域(九重町、竹田市、別府市)で開催されます。この大会を契機として、くじゅう連山に魅せられた山下が遺した「くじゅう」への思いを紹介します。

○ 苦勞の末にレコードが完成しました。

[昭和8年(1933)12月16日 工藤元平宛書簡]

彬麿は弁護士業のかたわら、趣味で多くの民謡を作詞し、その美声を披露していました。昭和8年(1933)、別府検番芸者の田島富江と東京日本橋のビクター会社にて、「瀬戸の島々」、「久住高原の唄」の2曲をレコーディングしました。書簡では、そのときの様子を事細かに説明しています。

- ★ 別府を“東洋のナポリ”と表現したのは、彬麿が「瀬戸の島々」の歌詞のなかで用いたことが始まりだとされています。
- ★ 戦前、全国で軍歌が歌われはじめると、「民謡こそ日本精神の発揚」と説き、文部省に依頼されて、「国民歌謡のあり方」を講義したこともあります。
- ★ 晩年、“山下歌翁”と改名しました。

● 100年後に伝えてほしい唄。

[昭和8年(1933)12月16日 工藤元平宛書簡]

彬麿と富江の美声は国内のみならず、満州・朝鮮方面にまで広まりました。彬麿は、久住の人々に対する感謝の表現として、この歌を久住町に贈呈しました。彬麿は、この唄を100年後に伝えてほしいと述べています。

先月の末から別検の富江女子同伴濡衣を全身に着つつ、ビクター会社にレコード吹込みのため上京しました。…(中略)

片面は「瀬戸の島々」リオーケストラ十三人伴奏
片面は「久住高原の唄」尺八三味線伴奏
であります。

瀬戸の島々は女史一人、久住高原の唄は私と富江女史二人であります…(以下略)

2、「久住大船、朝日に晴れて、駒は嘶く、草千里」…(中略)

実は久住の小学校の生徒否久住全町民の方々に對する私の感謝の表現であります。御厚意に予てより感激しておりました。私は「由布は見えぬか」の唄は「久住高原の唄」として久住町に贈呈し、百年の後に伝えて頂きたいと考えておりました。

2. 別府での彬麿の活動について

彬麿は、当初福岡で弁護士をはじめますが、大正末別府に移住しました。昭和2年(1927)別府の宣伝や開発に合わせて久住を愛していた油屋熊八の紹介で久住を訪れ、その大自然の雄大と荘厳さに魅せられました。それ以来、ことあるごとに久住を訪れ、別府を訪問した知人、文化人たちを久住に伴いました。

また、別府では、幅広い文化活動に尽力しています



油屋熊八、その後ろにいるのが彬麿。(1931年、久住小学校)

○ 別府には文化の成熟が必要

[昭和7年(1932) 別府文化協会創立の辞]

大正から昭和初期にかけて、油屋熊八らの広報活動により、別府は大観光地となりました。彬麿は、世界の別府と呼ばれるためには、文化的な発展が必要であると考え、別府文化協会をつくりました。定期的に学習会を行い、県内外の各地から同志が集まりました。また、講演会には新渡戸稲造、重光葵など、海外に精通した人物を講師に招いています。

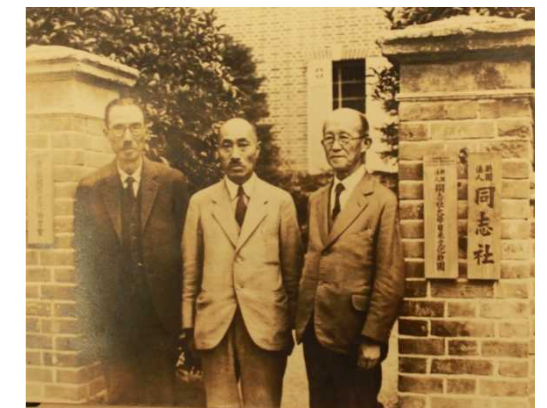
★ 講演をした人物(一部)とその講演内容について

- ・新渡戸稲造(国際連盟事務局長)…昭和7年4月「観光地としての別府市民の修養」
- ・重光葵(杵築市出身、外務大臣)…昭和8年2月「国際関係の重点と観光地への自覚」

※その他、別府文化協会は別府市立中学校の建設を要求し、それを実現させています。

3. 京都での彬麿の活動について

彬麿は昭和11年(1936)、同志社大学、ならびに近江兄弟社会の顧問弁護士として招かれ、依頼、京都に移住しました。戦後は、「日本的民主主義の確立」と題して、京都府下のみならず、九州方面にも度々訪れ、各地で講演活動を行いました。また、その際には久住を訪れることを忘れませんでした。



【左】彬麿 【中】工藤元平 【右】牧野虎次 同志社総長

★ ヴォーリズ(ウィリアム・メルル・ヴォーリズ)について

アメリカからきた建築家、実業家です。近江兄弟社の創立者であり、メンソレータム(現在、近江兄弟社ではメンターム)を日本に普及させました。社会公共事業や建築業界における功績から近江八幡市の名誉市民第1号となりました。

※1941年に日本国籍を取得し、一柳米来留と改名しています。

4. 久住への思いは永遠に

★工藤元平(1889~1968)

久住郵便局長や久住町長をつとめ、久住の地域づくりをすすめた先人です。多くの文化人、客人らを久住に案内し、地域の魅力を宣伝しました。彬麿と深い交流があり、彬麿から送られた書簡や彬麿に関する資料を収集しています。



●文化顧問として久住で暮らしたい

[工藤元平宛書簡]

京都に移り住んでからも久住への思いは冷めることはありませんでした。この書簡では、元平に町長になってもらい、自分を文化顧問に委嘱してほしいこと、そうなれば、半年ほど共に暮らしたいこと等を記しています。

工藤元平賢台
(…中略)
(夢の様なことではありますが、)賢台に久住町長になつていただき、拙者を久住町の文化顧問の一員に委嘱していただき、半年間を共々暮らしたいと思ひますが如何(呵々)
(以下略)

○重光さんの復帰うれしい

[昭和30年)2月12日 工藤元平宛書簡]

この書簡が書かれた前年に、重光葵が外務大臣に復帰しており、彬麿はそのことを喜んでます。また、広瀬正雄(日田出身の衆議院議員、のちに郵政大臣)のように道義に生きる人物こそ議員に当選してほしいと記しています。

★広瀬正雄は彬麿が別府にいたころから交流をもち、別府文化協会の会員でもありました。

工藤大兄 二月二十日 歌翁
(中略)
いよいよ選挙となりましたが、事にあやぶみ居りました重光さんも誠に幸運に返り咲きの場に抱かれました事は、御同慶に堪えませぬ。大分県は不^{あいかわらず}相変混戦の事と相察致しておりますが、広瀬氏を初め道義に生きる諸君のみの当選を希みてやみませぬ。
(以下略)

●久住高原で眠りたい…

昭和21年(1946)1月14日 工藤元平宛書簡

「久住高原を墓場にさせていただく事が、最も神意に叶ひ、それが自然の姿」と記しています。大分県を離れ、10年経っても変わらない久住への思いをうかがうことができます。

(…中略)
老後十年間を特に賢台の特別の御懇誼と御声援を仰ぎつつ楽しく過ごさしていただきたいものと念願いたしております。所詮は、朝に夕に久住阿蘇の霊峰を仰ぎつつ奉公いたしたいとの念願でありますから、やっぱし久住高原を墓場にさせていただく事が最も神意に叶いそれが自然の姿かとも考えております。どうぞ、禱りつつお考え下さいませ。
(以下略)

●久住の見納めになるだろう…

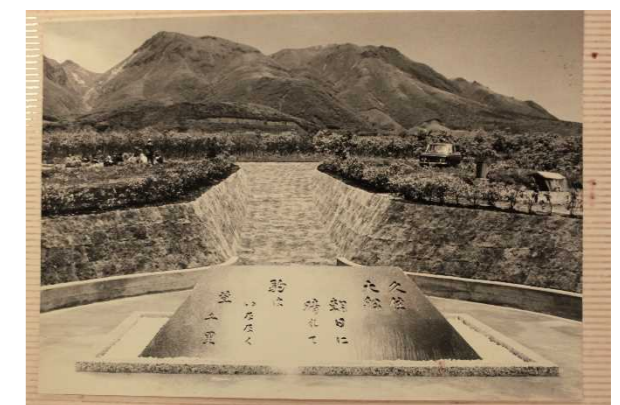
[昭和25年(1950)7月18日 工藤元平宛書簡]

別府、久住を訪問することを伝えた書簡です。久住訪問について、「今度が恐らく生涯の見納めだろう。」と記しています。この頃、相次いで2人の息子と妻を亡くしており、彬麿の喪失感もうかがえます。

二十七日午前十一時四十一分着は変更せぬ事に致しております。
久住では、一方ならぬ御厄介になる事と誠に恐縮致しておりますけれども、今度が恐らく生涯の見納めだろうと考えておりかすから何卒呉々も宜しくお願い申上ります。
…(以下略)

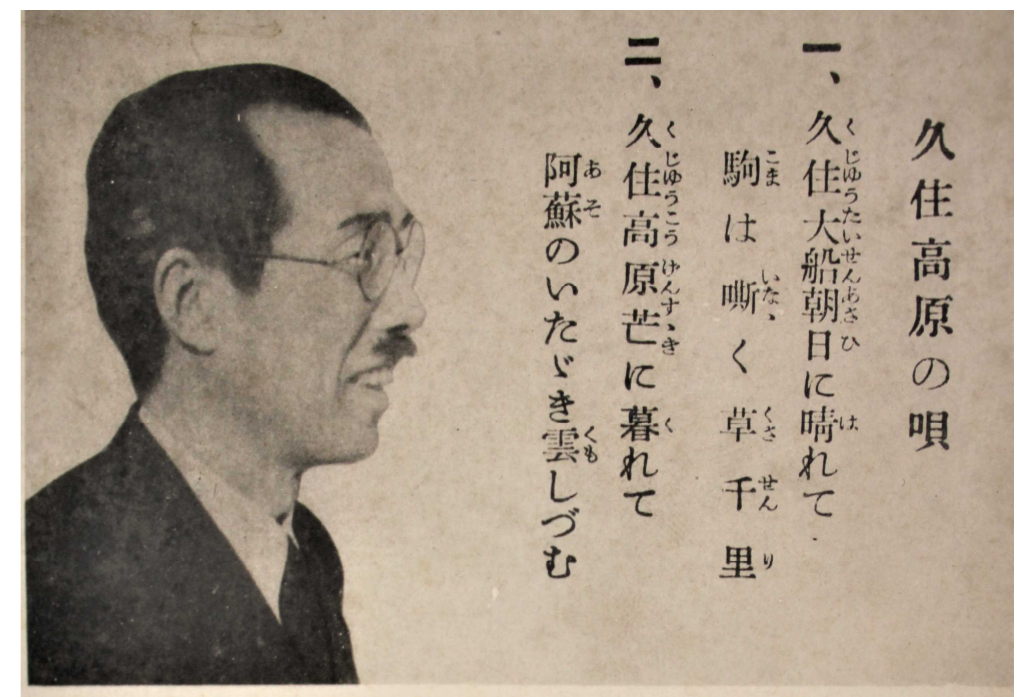
○彬麿の歌碑を久住につくる

彬麿は昭和30年(1955)、京都簡易裁判所で弁論中に倒れ、亡くなりました。死去から10年後、元久住町町長の工藤元平らが発起人となり、彬麿の歌碑が久住高原に建てられることになりました。歌碑の揮毫は木下郁知事、設計は磯崎新氏です。



歌碑建設当時(1966)の写真

★彬麿の歌碑は今も建設当時と変わらず「くじゅう」を一望できるところにあります。彬麿が「久住高原の唄を100年後に伝えてほしい」という願いは、今も久住で開かれている「久住高原の唄」日本一大会に受け継がれています。



久住高原の唄
一、久住大船朝日に晴れて
駒は嘶く草千里
二、久住高原芒に暮れて
阿蘇のいたゞき雲しづむ